

Newsletter

December 2010

<http://www.aack.or.jp>

目次

ノシヤック登頂五〇年目 ポーランドを訪ねる 酒井敏明……………1	ノシヤック計画成立裏話 —近江作の段 谷 泰……………4	準身障者の六千米 安田隆彦……………7	六粟五〇名山（天空回廊）を全山 登頂して 川崎 徹……………11	AAACKニュース 名誉会員 西島安則氏 逝去……………13	梅棹忠夫先生をしのぶ会……………13	京大山岳部 ニレカピーク登頂報告会……………13	新刊書紹介 「文庫版 梅里雪山 十七人の友を 探して」小林尚礼著……………14	「わが登山人生」平井一正著……………14	会員動向……………14	訂正とお詫び……………14	編集後記……………14
--	------------------------------------	------------------------	--	-----------------------------------	--------------------	-----------------------------	---	----------------------	-------------	---------------	-------------

ノシヤック登頂五〇年目

ポーランドを訪ねる

酒井敏明

一九六〇年夏AAACKパミール高原学術調査隊がノシヤック峰七四九二mに登った時、ポーランド登山隊との鉢合わせが起こった。アフガニスタン政府の正式許可を受け、登頂可能なルートを探り、たぶんこれは使えると思ったルートを見出してベースキャンプで休んでいたときに、雲つくような大男たちが突然現れた。（以下、敬称は省略させていただきます）

酒戸弥二郎隊長（五四歳）は農芸化学とりわけお茶研究の大家、吉井良三副隊長（四六歳）は生物学、特に虫の専門家、澤田秀穂（四三歳）は通産省地質調査所技官で地質学者として参加した。若手の三人廣瀬幸治（三〇歳）、私（二八歳）と岩坪五郎（二六歳）が登攀要員という役割である。首都カールを発つてからワハーン渓谷の玄関口イシユカシムに着くまでの二週間の大半は、カラチ港からカイバル峠越えで持ち込んだトヨタ軍用小トラック一台によるクルマの旅、カールで雇った運転手はバダフシャン州の山岳地帯に

入ってから前途の苦難を思つて職場を放棄し、悪路の運転をもつぱら引き受けたのが廣瀬だった。その廣瀬はCIを作ったところから風邪をこじらせて体調がすぐれず、実質の登攀はグローと私の二人の肩にかかってきた。

我が偵察隊は登頂ルートさえ発見すれば役目は終わったのだが、そこへ突然強力な競争者があらわれた。こちらは実動二人の控えめな隊であつたが、幸いなことに好天が続いたためにラッセルがほとんどなく、また、登攀が特別むづかしいところがなかったことなど、好条件に恵まれて二人だけでどうやら登頂可能の見通しを立てるところまでできたのである。この偵察結果を酒戸隊長に報告するためベースキャンプにおいてきたときに、同じ山を目標とする外国登山隊が到来したことを知らされたのである。

ポーランド隊はフワシンスキ隊長以下一〇人、別に映画撮影班が二人の大編成で、アルプスやカフカスの難場で勇名を馳せた第一級登山家何人もいるらしい。後進的なアフガニスタン政府当局者が登山隊に対応するルールを知らず、同時に二隊に許可したのでこの事態が発生したのだが、私たちは遅れて突如出現したかれらを一顧だにしないで先行する



日本ポーランド登山者交流の集い アキコペンション

態度をとることをしなかった。CⅡでフワシンスキ隊長と話し合いをした。私たちはCⅣ予定地までの偵察がすんでいて、そこから頂上までの登攀可能性はあると考えていることを説明し、貴隊がここまで来

たのであるからできれば共同の頂上攻撃案をつくりたい。隊員たちが高度に順応できるまで出発を二、三日延ばすことはできるがどうですかという提案に対し、隊長は態勢を整えるためには日数をもっと必要で、そんなに早く準備できないと答える。配慮はありがたいが、日本隊は優先されるべきだと理解できるので、先に登頂を試みることに反対はしません。ご成功を祈るとの態度を示してくれた。結局、岩坪と私は八月十七日ノシャック初登頂に成功した。私たちが山を去ってはおるのちに知ったことだが、ポーランド人登山家七人が八月二七日同峰に第二登頂したのである。

私たち二人はCⅢから上に向かう時となりのポーランド隊テントにいた隊員たちから上等の高度計と軽便なボタンガスコンロを貸してもらって上で使用し、CⅡへのくだりに立ち寄ったときにはかれらは私たちの成功を心から喜んでくれ、温かい紅茶やらスープやらで歓待してくれた。心ならずもライバル関係になったのだが、悔いやわだかまりが残ることのない、心の通う友情を結ぶことができたと思う。

そこで、半世紀ぶりの再会を果たすためのポーランド訪問旅行を企てることにした。

岩坪がPAC（ポーランド山岳会）のメールアドレスであてに最初の照会メールを送ったのは昨年四月、しかし待てど暮らせど返事は無かった。私はメールではらちが明かないと思いいPACあてに英文の手紙を書き、六月一日に投函したが、結果は同じだった。

日本ポーランド交流センターなる団体があることがネット検索でわかったので、このセンター宛に事情を説明してPAC宛の手紙を同封、しかるべきところへ転送してほしいと依頼したのは九月十五日だった。一月経って同センターから初めて手紙が来た。かつての隊員六人が生存すること、登攀隊長をつとめたビエルのメールアドレスを知ることができた。直接ビエルにメールを出すまでに半年かかってしまった。

ビエルとかれの秘書役をつとめたヴィエルの助言を受け、ポーランド南部クラクフ市の旅行会社が送信してきた旅程をもとに友人、知己に旅行団への参加を呼びかけて、一五人のグループができた。八月二三日出発、九月一日帰国のスケジュールで、首都ワルシャワ、南部の古都クラクフ、タトラ山地山麓部をいっしょに訪れてくれたのは以下の人々である。AACKから、中島道郎、岩坪五郎、芳賀孝郎、川嶋眞生、藤本栄之助の各氏は夫妻で参加した。酒井敏明は単身、ほかにKUACのOB青野敏幸、学習院山岳会の賛田統亜、友人の秋山ひさ、同じく古川京子のみなさん。男子八人、女性七人である。

ご参考までに旅費を紹介しておく、最大のアイテム航空運賃を含め一人当たり約三三万円であった。

ワルシャワでは旧王宮、ワジェンキ公園など、クラクフではヴァヴェル城、ユダヤ人ゲッツト、ヴィエリチカ岩塩鉱山などなど、ひととおりの観光名所を参観したことはここには一切省略する。ポーランドの登山家たちとの

交流だけを以下にあらまし報告する。

一九六〇年のノシヤック登山隊存命の人のなかに健康がすぐれない人やアメリカに住んでいる人がいて、私たちが実際に会えるのは二人か三人だろうということは事前に承知していた。しかしポーランドはノシヤックを皮切りとしてヒンドウークシユに数多くの遠征隊を出したことはよく知られていたし、一九七三年二月ポーランド登山家二人がノシヤックの厳冬期登頂に成功し、これが七〇〇m以上の高峰に対する冬季登攀の嚆矢となつて、その後エヴェレストなど八〇〇〇m峰でも試みる潮流ができた。カラムやネパールヒマラヤで活躍する尖鋭的登山家たちをポーランドは輩出しているの



左から岩坪、ビエル、中島、芳賀、酒井

ある。

ワルシヤワでは三人に会うことになった。クリンスキはノシヤック隊員で、あとでクラクフで会うビエルとともに六〇年八月二七日ノシヤックに登頂した。八二歳だと言っていたがたいへん元気である。ソボレフスキはカンチエンジュンガ、カンパチェン、パミールのほか、エクアドルアンデスやアラスカにも行ったということだが、英語を話さなかったのてくわしくはわからない。三人目はクルチャブ、一九七六年K2の北東稜に取り組んだポーランド隊の隊長をつとめた人である。贄田は同じ年スキヤンカンリに登った学習院隊登攀隊長であり、その時このポーランド人たちと現地で交流する機会があつたので二人は話す材料が多いようであつた。

八月二五日ワルシヤワから乗つたポーランド国鉄の急行列車がクラクフ駅に着いた時、ビエルとヴィエルバが出迎えてくれた。ビエルはアルプスとカフカスで目覚ましい岩登りをしたポーランドを代表するヴェテラン登山家で、六〇年には登攀隊長をつとめた人、私たちはCIIまたはCIIIできつと会つていたにちがいないのだが、その時には個体識別ができていなかったから顔をみてわかるものではない。しかし半世紀ぶりに駅頭で会つて思わず抱き合つて握手をしたとき、私は感極まつて目頭が熱くなるのを覚えた。ビエルも同じようであつた。続いて岩坪も握手と抱擁。

年は八一歳か八二歳だとヴィエルバから聞いていた。英語はだめでもドイツ語はできると思つていたのに、話したのはフランス語だつ

たので私たちとの意思疎通は不十分にとどまつたのが残念である。やや小柄な夫人もごいっしょであつた。ヴィエルバは国際会議出席のため五月に京都へきたのですでに会つてゐる。ビエルはその夜岩坪夫妻と私を自宅に招いてくれたので、とあるアパート三階にあつた立派なお宅にビエル夫妻をお訪ねした。

ビエルは二八日のザコパネ南方、タトラ山脈の一つの峰カスプロヴィ・ヴィエルフへのロープウェイによる遠足に同行し、谷間の山小屋での一泊にも付いてきて、大いに私たちの接待に意をもちいてくれた。この日は冷たい小雨が降り続くありがたくない天気であつたが、八二歳の年を感じさせない元気な歩きぶり身のこなしであつた。

二九日山小屋からおりてバスで一時間余走つた後ドウナエツツ河の筏下りを楽しんでから、ピイニイ山脈の懐に抱かれた山荘に向かつた。当地にながく住む日本人女性が経営するペンションである。ここがビエルが選んだ日ポ両国登山家交流の会場であつた。

夕刻、屋外で陽光が利用できるうちに合同写真を撮影、時刻を惜しむようにペンション最大の部屋に両国三〇余人があつまつて会合がはじまつた。

まず、ビエルが挨拶、日本からの参加を歓迎し、登頂五〇年の記念の催しであることなどを説明した。ついで、私がAACKノシヤック隊の登山を振り返り、山中でポーランドの登山家たちと出会つて以後のことを話した。岩坪が器具や食糧の面で世話になつたことをも含め、かれらとの交流を具体的に紹介した。

ついで、ポーランド隊が撮影したフィルムをもとに作成された映画DVDが正面スクリーンに上映された。約五〇分、ナレーションはもちろんポーランド語であるが、あの隊にはプロ写真家が二人いて、うち一人は六九〇〇mの最終キャンプまであがったので充分迫力ある映像であった。若かりし岩坪と私の姿も二、三カットに登場したが、岩坪の顔にトシアキ・サカイ、私の顔にゴロー・イツボのナレーションがかぶさったのはご愛嬌というべきか。ビエルもクリンスキも今回実物に直面して、正しく識別してくれるだろう。

列席のポーランド登山家から若干の発言もあったが、最後にビエルが少し長い目に話をした。彼にすれば話したいことは山ほどあっただろうが、全体の時間が限られていたので、進行係を務めたマイヤーが適宜短縮に務めたようである。ビエルのポーランド語をマイヤーが英訳した。女性二人を含めポーランド登山家は一〇人ほど顔を見せていた。ビエルのほかにノシヤックに登頂した人が少なくとも四人いたし、ほとんど全員がヒンドウクシュのワハーン側からの登山に何回か参加した経歴の持ち主であった。ほとんどは五〇歳代以上のように見受けられたが、ワルシヤワで最初にあつたクリンスキのいわく、まだ八月の登山季節の最中なので、現に多くの第一線登山家たちは登山に出かけているためにこうした会合に出席できる人が少ないのである。

共同通信のベルリン支局長高橋秀次さんがポーランド人社員をつれてペンションまで取

材にきておられたし、クラクフ市の地元新聞社から記者がきていたという話であった。

会合が終わると八時を過ぎていたので、ポーランド側出席者たちは私たちに挨拶をするのももどかしいという感じで、急ぎペンションから去って行く。クラクフまで車なら二時間くらいかかるのであろう。彼らがあわただしく出てゆくと、残ったのは私たち一五人、マイヤー夫妻、共同通信二人であった。当夜このアキコ・ペンションは一行の借り切

ノシヤック計画成立裏話

—近江作の段

谷 泰

一九五八年のチョゴリザ登頂成功ののち、一九六〇年計画として立案されたサルトロ計画へのパキスタン側からの許可見通しが、一九五九年の後半になつても一向に見えてこない。とすると、来年は計画なしの、空白の年となるのか。こういう見通しに対して、はやるエネルギーのはげ口を求めるかのようになり、当時なお大学院学生であった学士山岳会の若手、酒井敏明、岩坪五郎などを中心として、パミールのノシヤック計画が立てられ、そしてわたしも、チョゴリザ遠征の準備にどっぴりつかり、留守本部として、成功のち晴れやかな面持ちで帰国した同年の岩坪や高村を迎えたものとして、次の海外登山計画にはぜひ参加したい。こういう思いに駆ら

りだった。

八月三〇日、スロヴァキア国境に近い古城や古びた木造建築の教会堂などを参観、夕方の列車でクラクフからワルシヤワに移動してツェントウルムホテルに泊まる。三人のポーランド人登山家をかこみ、ホテルのバーでひと時を過ごして別れを惜しんだ。

翌早朝ワルシヤワ空港からフィンランド航空ヘルシンキ行きに搭乗、乗り継ぎの関空行きAY七七便で帰国の途についた。

れて、ノシヤック計画への参加を希望していた。そして一九五九年もすでに終わりに近づいた時のことではなかったかと思う。わたしたちは、若手計画としてのノシヤック峰試登をふくむパミール遠征計画というものを準備して、その承認を得るべく、理事会の開催を要請したのだった。

ちなみに当時、理事会は、近衛通りの榮友会館でおこなわれるのが常であった。このときも、予約した小会議室のテーブルの奥の座席には、今西さんをはじめ、桑原さん、中尾さんなど先輩理事が、居並んでいたのを記憶している。他方、当計画の立案者酒井、岩坪は、若の若であつたために理事ではなく、岩坪の言によれば、若手理事としては、山口さん、脇坂さんが、この計画を説明するものとして出席していたようである。それにしても、こういう若手理事として山口、脇坂先輩がようやく出席できる理事会に、酒井、岩坪と同時代であるわたしがどうして出席していたの

か。それがいま思い返すにつけ、不思議でならないのだが、わたしは、その理事会に出席しており、その晩に次のような出来事が起こったことを、今でも鮮明に記憶している。

理事会はまず、一九六〇年を予定していたサルトロへのパキスタン側からの許可をめぐり、当座その見通しがないことの報告がなされた。そして、その空白を埋める六〇年計画として、酒井、岩坪などが、ノシヤック計画というものを立てていることが、若手理事から報告され、その詳しい説明とともに、その承認が求められた。ところがその承認が求められた直後だった。今西さんから緊急提案がなされたのである。その内容は、梅棹がビルマのカカボラジ登攀をも含めた学術登山計画をもっている。ノシヤック計画もそれなりに、若手の意欲を示すものとして評価できるが、それよりもカカボラジ計画の方が、遙かに意味がある。だから、ノシヤック計画は引き下げてもらうことにして、カカボラジ計画に若手も参加してもらおうではないかというものであった。これは、すでに秋以来、ノシヤック計画を練ってきた若手にとっては、思いがけない天下りの提案であり、そう易々と受け入れられるものではない。

こうして、若手理事の推すノシヤック案と、先輩理事の推すカカボラジ案とは真つ向から対立した。そして、そこでどのくらい議論がなされたか、わたしは正確には覚えてないが、やがて、一向にらちのあかない議論に終止符を打つかのように、今西さんがつぎのように言ったのは覚えている。「これ以上議論して

もしゃあないで。これから近江作や(当時、先輩たちがしばしば利用していた祇園のお茶屋)。おまえたちもあとからこい」。こうして今西さんが立ち上がるとともに、他の年配の先輩理事たちもそれに続く。そして、タクシーを拾って近江作へと向かってしまった。そしてわたしは若手も、今日は結論なしで、ことは次回へと先送りかと思いつつ、その後を追うことになった。

ところで、今の近江作は、玄関を入ると、右手に上がりの間があり、そこから左手に階段を上がると、座敷に通ずるようになっていく。ところが当時は、玄関に入って、正面の上がりの間からまっすぐ階段がついており、二階の座敷に通ずるようになっていた。そこで、わたしは若手が、やや遅れて到着し、その階段を上がりつつあったとき、そのときのことである。突如、階上の座敷の方から「ばんざーい。ばんざーい。決まった」という先輩たちの叫び声が聞こえてきた。いったい何事が起こったのか。こういぶかるわたしたちが、座敷に入るや、そこで通告されたのは、カカボラジ計画にことが決まったという、先輩たちの一方的な決定の知らせであった。それにしても、いったいこういう理不尽なかたちでのことの決め方であつていいのか。そのときわたしの脳裏を横切った思いを言えば、こういうものであつたが、思いもよらぬことの決め方に、その場でわたしは言葉を失っていた。ただ、じわじわと怒りがわき起こり、帰宅しても、その怒りが収まらない。そして、こんなことって本当にあるのかとは

じめて思ったのだが、その日から数日のあいだ、怒りのあまり頭髪が直立し続けるという、生まれて初めての経験をしたのだった。

ともあれこうして、ノシヤック計画はいったん引き下げられることになる。そしてわたしも含めて、ノシヤック計画への参加予定者であつたものに、梅棹さんから、計画を練るために梅棹邸に集まるようにという連絡がくる。こうして当時、北白川の疎水縁に住んでいたわたしは、疎水をわたって彼の家にむかうものの一人となり、やがて心もビルマへと向かい、あのカンナの削りくずのようにもみえるビルマ文字の学習をはじめ自分をそこに見いだすことになった。

ただ、こうして成立したカカボラジ計画は、ほどなく潰えることになった。一九五九年の暮れであつたか、翌年の初めのことだったか。学士山岳会の記録からは確かめようがないが、ビルマ政府から、このビルマ計画への不許可が通告されることになったのである。というのも、梅棹さんは、ひとまずの隊の構成が決まった後で、ビルマ政府に申請するまえに、この計画が立てられたことをはやばやと報道世界に公にし、そのことが新聞に掲載されることになった。このことが、ビルマ政府側を刺激したのだろう。われわれはいまだこういう計画があることを知らされていないという理由で、ビルマ側から不許可にする旨が、ビルマ大使館を通じて、通知されてきた。

ノシヤック計画はこうして、短期間の眠りのちに、息を吹き返すことになる。そして一九六〇年二月二〇日の理事会において、へ

ミール地域に対する學術調査および、同地域の処女峰ノシヤックの試登を目的とする計画が承認される。ちなみにこの理事会記録では、まだこの隊は「吉井良三を中心として、一九五九年秋より計画されていた」ものとして記されてなく、隊長の酒戸弥二郎さんの名は現れていない。隊長を含め、すべての隊員の決定はその後に、実行委員会でなされたはずであり、わたしもそこで隊員候補として名を連ねることになったのだった。

つまり、少なくともわたしを知る限り、いや関わった限りでは、ノシヤック計画は、こういうカカボラジ計画との絡みでの、紆余曲折があったことになる。しかも、あの「近江作の変」とでも言える出来事は、およそわたしにとつては強烈な社会経験として記憶され続けることになった。にもかかわらずである。わたしはノシヤック登頂五〇周年の機会に、上に述べたような出来事を、ノシヤック成立譚の一こまとして酒井、岩坪兩人に聞いたのだのだが、二人ともそういうことがあったなどおおよそ記憶するところではなく、そんなことがあったなど存知しないことだということである。酒井、岩坪兩人は、まだ理事ではない、当の理事会に出席してなかったというのであれば、存知しないというのも当然のことかもしれない。それにしても、かれらと同年代であるわたしがどうして、山口、脇坂さんなどと一緒に、その理事会に出席しえて、こういう出来事を経験することになったのか。この経緯だけは、いままって明らかでない。もし山口、脇坂先輩が、存命であれば、問

いたずすこともできるのだが、かれらはもはや聞く耳を持たない世界に旅立ってしまった。とこう思うと、今や誰もこういう出来事を、ノシヤック成立譚の一こまとして記す人は、わたし以外にはないのかもしれない。こういう思いのもと、今回ニュース・レターでノシヤック登頂五〇周年特集をすると聞いて、筆をとらせてもらうことにしたというわけである。

ただ最後に、ノシヤック計画をめぐる私的後日譚をも付記しておこう。先にも記したように、ノシヤック計画は返り咲き、わたしも隊員候補として、その準備に奔走し始め、アフガニスタンへの思いを強めたのだったが、それは三月も中旬を過ぎてからのことだったと思う。ある日、わたしは、京大の西部構内に向かうべく、総合図書館脇の道路を下って、東大路を渡ろうとしていたときのことだ。そこでわたしはばったりと隊長の酒戸さんに出会ったのだった。そして、かれはちょうどよいときに出会ったと言わんばかりに、道路脇にわたしを誘い、「おい、人文科学研究所で助手の公募があるということではないか。おまえはそれに応募しないのか」と尋ねたのである。確かにわたしは、すでに人文の西洋部、しかもわたしの専攻に近いかかわった部門で、助手が転出し、そのポストを埋めるべく新たに助手公募がなされていることを知ってはいた。ただ、当時わたしは、海外登山への思いに駆られているばかりか、すでにノシヤック計画の隊員として思いはアフガニスタンに向かっている。そこでわたしは、「い

や、わたしはようやくノシヤックに行けることになって、そのつもりになっていきます。そんな時点で、助手試験を受けるつもりはありません。それこそジャーナリズムでならしているような人がいるような人文には行くつもりはありません」と答えた。それにたいして、酒戸さんは、いかにも阿呆といった面持ちで、「国外の山登りに行く機会はまだいくらでもある。人文は研究所として立派なところだ。助手試験を受ける」と言った。たしかにわたしは、一九五五年、カラコラム・ヒンドークシ調査隊が組織され、人文科学研究所の資料の梱包のために山岳部員が手伝いになり出されたとき以来、人文科研というものに強いあこがれをもってはいたことはたしかである。しかもすでにわたしは、今西さんの主催する共同研究会にすでに参加を誘われている身であった。そして思いがけず、ノシヤック隊の隊長から、今回は隊への参加はあきらめて、人文の公募に応募せよといわれる。ともに実現を目指した酒井、岩坪兩人には悪いが、今回は酒戸さんの言に従って、人文の助手試験を受けることにするか。こうして、ひとまず隊長酒戸さんのまえでは、かっこいい言を弄したものの、やがてわたしは隊長の助言に従って公募試験を受けることにした。そして幸い採用されることになり、わたしは正式にノシヤック隊から戦線離脱することになったのである。そして、「海外の山登りにいく機会はまたいくらでもある」という酒戸さんの言葉は、事実真となり、わたしは翌々年、一九六二年サルトロ・カンリ登攀隊

員として、カラコラムの地を踏むことになったのだった。

酒戸さんがどうして、人文での助手公募についての情報を入手して、わたしにそれへの応募を勧めたのか。考えるに、あり得るとすれば桑原さんか、すでにわたしが参加していた人文での研究会の班長である今西さんか、そのいずれかから、このことを知らされたときを考えるほかはない。ただそれにしても、このときの酒戸さんとの出会いは、わたしにとっては、その後の人生にとっての決定的な分岐点となる出会いであったことは間違いない。

準身障者の六千米

安田隆彦

山選び

キリマンジェロで五千米を登ったら次は六千米に挑戦したくなった。

ネパールにはトレッキングピークとして六千五百米以下の山が三三座あり選択幅が広い。高所で岩登りのない所、普通の人より三割方のろいので最終キャンプから九時間くらいで登頂して帰れるところでないとか暗くなつて危険と思ひ探したところ、メラピーク（六四六一m）が浮上した。リーダーに泉谷洋光（六四年入部 六五歳 イッセキ）が参加してくれ実現の運びになった。

とともに、まさにノシヤック隊からの戦線離脱の契機となったものとしても忘れがたく、〈近江作の変〉から〈戦線離脱〉までのノシヤック計画との関わりの数ヶ月は、わたしにとってはきわめて濃厚な時間だった。

というわけで、ノシヤック登頂五〇周年の機会に、ノシヤック計画との関わりのわたしの個人史を想起したのだったが、そのうちに、今やわたしだけが見聞したノシヤック計画の成立の経緯があるかに思われただけに、あえてこの機会にそれを書かせて頂くことにした。

準備山行

一年の間に月二回のペースで準備登山が計画された。しかし実現したのはその三分の一。六〇歳代の頃は体のどこかが痛いというのが普通であったが、七〇歳代になると痛いところがいつも複数個所現れる。体にはこんなにはたくさん痛くなる場所があると感心するばかり。整形外科ではレントゲンを撮って、痛み止めの薬をくれるだけなので対策にならない。もっぱら整体師的東洋療法に頼りながら、痛さをこらえながらのトレイニング、パラリンピックの選手の気概で体力向上に勤めた。

高度順応

第一回目の高所登山ではダイヤモンドックスを使用したのが下痢で悩まされた。二回目は漢方薬柴苓湯を使用したのがやはり下痢。今回は中島道郎医師の言う、「ゆつくり歩いて登れば

薬の必要はない、テントに入るのは少し高いところに登ってからすると良い。」の助言に従った。泉谷は有名な遅速登攀者、その上草花の観察に道草し、句帳を取り出して思いついた俳句をメモするなどゆつくり登山の代表なので高所キャンプ（五八〇〇m）に入つたときは二人共万全、食欲も旺盛であった。しかし良く見えたのは呼吸器系統から胃袋まで、私の腸は酸素供給量が少しでも減るとすぐストライキを起こす。最初から最後まで下痢に悩まされた。不思議なことにそれからくる体力減退がほんの僅かであったのは幸いだった。腸で栄養を吸収した後、最後の固結段階機能だけが低下するのではないかと推測している。

エージェント

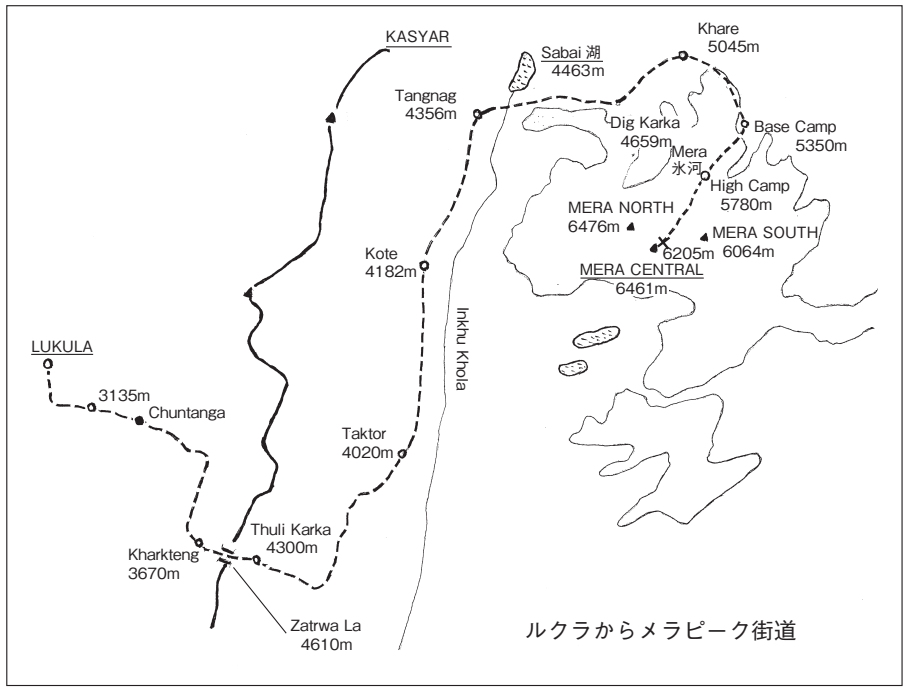
昨年一度使った Adventure Pilgrims Trekking 社を引き続き採用、誠意を持って対応してくれた。

費用

普通のメラピーク登山は一六日間だが、三日間の余備日を余分に加えて入山一九日間、日本発ベースで二三日間、二人の客に対してシェルパ、ポーター総勢九名、飛行機代一二万円、エージェント費二七〇〇ドル（含チップ）、雑費三万円、合計約四〇万円

海外登山保険

日本山岳協会山岳共済会の個人加入で申請した。AACK経由と比べると、国内登山の



場合、費用は変わらないが海外になると大いに高くなると聞いていたが、現実ほぼ同じであった。違いはAACKの場合は二〜三ヶ月前には詳細計画を出さねばならないが、個人加入の場合は一ヶ月以上前に出さない、計画は日数と目的山名の記入程度で済む。保険料金
 チュルウエスト (AACK経由) 三二日間

ルクラからメラピーク街道

七三〇〇円
 メラピーク (個人申請)
 二三日間 六一六〇円

結

一番ヒマラヤの美しく見えるルートとして、その名に恥じぬ素晴らしさだった。
 六千米台にも踏み込めた。先はまだまだある。

以下行動記録を記す。

二〇一〇年九月十五日(水)曇り
 CX501便 一・一・〇〇 成田発
 一〇・一五pm カトマンズ着

成田空港ロビーにて、泉谷が一年前に渡り出たあったメラピークの地図を取り出し「メラピークはどこにあるんや」と聞かれたときには言葉を失った。

香港乗換え、ダツカ経由カトマンズ定刻着。三〇日のマルチエントリビザを四〇ドルで買い通過。荷物も

無事一緒に出てきてエージェントに迎えらる。

九月一六日(木)曇り カトマンズ 気温
 二一度 一五〇〇m

エージェント事務所にて細部打ち合わせと契約書のサイン。今年にはモンスーン明けが遅れ、ルクラまでのフライトが少なく、人輸送が優先で、飛行機で運ぶ予定の現地調達資材

が運べない。五日前に急遽カトマンズからジュリまでバス、その後ポーターが担いで五日間歩き、我々の飛行機便に合わせてルクラに着く予定に変更したとのこと。

九月一七日(金)曇り Lukla 二八四〇m

一六度

朝のローカル線空港は人で一杯。ここで五日間待った人や二日間待った人に会う。六時一五分発の飛行機に九時一五分にようやく搭乗できる。最盛期には三〜四便出る飛行機も今日の天気です五便のみ。搭乗出来たのはエージェントの力の差。ルクラに降り立ったとたん違いを感じる気持ちの良い空気。残念ながらもまだポーターが着いていないので一日待つ。

登山許可登録所に行つて許可を見せる。メラピークへはこの秋は我々が四パーティー目。春は二六パーティー行ったとのこと。エベレスト街道は昨年二万人入山。登攀チームは二三パーティーで一〇〇人以上登頂成功した。ごみの搬出には特に注意が行き届き、下山したときには缶詰、不燃物を持ってきて見せに行かねば、二五〇ドルの預託金が返ってこない。

九月一八日(土)晴れのち小雨 Lukla 朝

一〇度

一一・〇五 ルクラ発 二八四〇m
 一四・〇〇 三二三五m 谷川に阻まれテント張る

予定より一日遅れでポーターが到着する。早速荷物配分をして出発。三時間ほど歩いて丸木橋の流された谷に出会う。空身の人は渡

れるが荷物を持ったポーターは無理。

明日の朝、水が引くのを期待するとともに、引かねば丸木橋を新設して行くこととし、キャンプを張る。

九月一九日(日) 晴れのち小雨 一〇度

テント地発 八・四五 渡渉完了 九・〇五

Chutanga 一一:二五 三〇二〇m 昼食

後発 一一:五〇

Kharteng 一二:四五 二二七〇m

幸い谷の水は多少引いて、パンツひとつになり数歩で渡りきる。冷たい水で足がしびれる。二度同じようなパンツ丸出し渡渉をした。モンsoonが明けかかっているときで花が一番盛んなのか、一面の花を満喫。泉谷によれば植生が非常に日本に似ていて箱根の山を歩いているようだ。ただし石楠花などはこの地に適合しているのか、幹の太さが三〇cm高さが二〇mほどに成長し、芸術味溢れる風情をしている。

Chutangaで小屋を借りて昼食。さらに峠に向かつて登りKhartengでテントを張る。小屋も開いていて泉谷は小屋泊り。夕食には味噌汁、豆腐が出、トレッキング会社の気使いがありがたい。泉谷がトーガラスが極端に好きなことがわかると直ぐにルクラまで買増しに走らせていた。小屋はどこも大体同じだが、大きさがオーナー部屋三畳、キチン兼食堂が一〇畳、寝室の大部屋が二〇畳位の薄暗い小屋。壁は隙間だらけ、天井には防水用のブルーシートが一面ぶら下がっている。バター茶のサービスつきだから悪くない。泉谷

は雨のテントよりポーターと一緒に大部屋がいい。

九月二〇日(月) 晴れのち小雨 四度

Kharteng 八時発

Cheerala 峠 一〇:二〇

Zatwa La 一一:四〇 四六一〇m

Thuli Kharka 一二:一〇 四三〇〇m

テントを出ると快晴の空にくっきりと雪山、岩峰が迫力いっぱい迫る。超える峠のルンタがきわめて小さく、巨大なカールの頂点に見える。一時間二〇〇mのピッチで登りきる。

そこからZatwa Laへはトラバース気味に軽い登り。峠から反対側は霧がいつぱい、小雨もぱらつき始める。急な坂道を下るとお花畑と岩に囲まれたThuli Kharka。テントを張って午後は休養。小屋の下は牧草地になっいて羊が二〇頭ほど草を食んでいた。夕食はイタリア料理で野菜スープがものすごく美味く、続くラザーニヤ、ピザもおいしかった。

九月二一日(火) 曇りのち小雨 五度

八:二〇 Thuli Kharka 発

一一:〇〇 Big Boulder

一二:四〇 Taktor (View Point) 四〇二〇m

小屋を出てからトラバース気味に多少の上りを二時間、下りを二時間、相変わらず、岩と花の美しいところから少し下ると石楠花の大群落。Taktorはまた下り尾根の途中でメラ谷本流まであと二時間ぐらいのところ。

九月二二日(水) 雨 一〇度

Taktor 八:三五

Mosom Kharka 一〇:三五 三二九一m (本谷合流点)

Kote 一一:二〇 四一八二m

入山して始めて朝から雨。流れ込む小川が滝になっているところを歩いて降りたり、すばらしい滑滝を眺めたり、雨と霧の中でジャングルがいつそう引き立って見える。インクレー谷に合流するところは、昔Mosom Kharkaがあつた所。一二年前九月、氷河湖(Sabai湖)の決壊で川底が二〇mほど削られるような大激流となり村ごと流された。

一二年で川原に残された巨石にコケが生えて美しい景観。インクレー川は激流、そのすぐ近くを歩くので迫力満点。Kote村はこの河川では最大の村でロジが一〇数棟建っている。電話もあるが太陽電池なので今日は不通。持参の地図(カトマンズ購入、四万分の一)は決壊前のルートで、決壊以後の村の新設、喪失が表されていない。夕刻、オーストラリア隊の一六名が次々と到着、メラピークに全員登頂したと。ハイキャンプからベースに戻るまで一四時間、ラッセルが膝まで、帰りはゴジラ落としてこぼすた。我々の前に入った隊で成功したのはこの隊だけの様子。

九月二三日(木) 曇り時々雨 八度

Kote 八:一〇 発

昼食 一一:五〇 一二:三五

Tangnag 一二:二〇 四二五六m

川原を歩き始めると、氷河湖決壊で流されてきたものすごい巨石が苔むして鎮座している。メラピークの最後の西面岸壁が現れる。大きく広がった扇状地に生えた灌木は紅葉の



Khareにて 左泉谷、右安田 バックはメラピーク

真つ最中で美しい。やがて雪渓が現れ始め、雪崩の音が響き始める。昼食は牧場の中にてイタリア料理。目的地の少し手前でチベット仏教寺院があったので安全、成功祈願をする。Tangnag は氷河湖決壊のすぐそばの村で十軒ほどの家、数本の川が合流するため川原が広く、農地も多少ある。氷河湖決壊の様子を住民に聞いたが決壊した場所では被害が少なく、下流に行くほど大きくなる感じを受けた。

九月二四日(金) 曇り 四度 休養日

初めての雨なし朝、休養日で、高度順応のため裏山に上り始めると太陽が一瞬顔を出し、メラピークの西面岸壁が姿を現す。灌木の紅葉が見事な中をかなりの急斜面を登る。

今は小さくなった氷河湖 (Sabai 湖) がこじんまりと見える。

九月二五日(土) 快晴 二度

八:三〇 Tangnag 発

一:一一〇 Dick Karka 四六五九m

一:三三五 Khare 五〇四五m

ダム決壊の前を横切り、メラ氷河からの谷を上る。Dick Karka は広い牧草地。周りの山々よりそこから広がる扇状地の風景が美しい。最後の村、ベースとなる Khare、は十数件のロッジが建っている。メラの頂上がほんの一時見える。到着後裏山に一五〇m 登り登高低泊を実行する。

九月二六日(日) 快晴 マイナス一度 休養日

二回目の休日、裏山に昇る、メラピークのトップが良く見えうれしくなる。午後は充電と明日からの登攀に向けての荷物整理。

九月二七日(月) 快晴 マイナス四度

八:三五 Khare 発

一:一五〇 五四〇〇m 雪渓下 靴履き

替え 昼食

二:三〇 同 発

一四:四五 Meza 峠 着

一五:〇五 テント地 着 五三五〇m

夕刻マイナス三度

Khare から良く見えるメラピークは歩くに従って刻々と姿を変える。Kysnar(六七七〇m)、Kusumkhang Kards(六三七〇m)が美しい。雪渓下でポーターが運んでくれた雪靴に履き替える。クレバスの多い雪面を縫いながらメラ峠へ。峠の下五〇mほどのところ、



メラ峠よりピークを見る。左中央部二つある岩山に高所キャンプ、その右に見える雪稜の左側を抜けて中央丸い突起状のピークを目指す。

岩場で、水も取れるキャンプ地にテントを張る。最盛期にはテント地確保が大変とか。テント地よりピーク、第Ⅲキャンプ地がよく見える。Chamlang(七三一九m)の夕日に映える姿が美しい。

九月二八日(火) 快晴 マイナス七度

八:一〇 メラ峠発

二:〇〇 高所キャンプ地着 五七八〇m

二:四〇 高所順応 五八〇五mまで

マカルーを正面に見ながら雪面を登る。やがて右はカンチェンジュンガからマカルー、ローツェ、エベレスト、左端がチョーユーマで、噂のヒマラヤ大パノラマが見えてくる。今までで一番の景色。第Ⅲキャンプ地は岩棚の中にあるようでテントを張れる用地が小さ

い。高所順応に七五m上がり俳句を一〇句。

九月二十九日(水) 快晴 マイナス四度

一〇〇〇 キャンプ地発

九〇〇〇 六二〇五m 引き返し地点

一〇〇三五 高所キャンプ着

一一一五五 同 発

一六二二〇 Klare 着

午前一時月光の中アタックに出発。二人一組で行くはずがザイルを一本しか持つてきていないのでザイル使用せず出発。かなりの急な雪面をいつまでも登る。ラッセルは膝まで、二人のシェルパが交代で当たる。やがて朝焼けに輝く山群がゆつくりと現れ始める。荘厳だ。

三角形の六千米級の山の裏に太陽が出始めるとその一瞬、その山全体に金色の光背が輝く驚異的現象を見ることが出来た。九時になりまだ二〇〇mも登らねばならない時点(六二〇五m)で引き返す。降りの時間と明日からの五日間の歩き続けを考慮して余裕を持って登攀を打ち切った。降りには雪面を駆け下りる。高所キャンプで休憩し、ラーメンのサービスを受けてからベースキャンプに向かう。一五時間歩いたのに特に疲れは感じなかった。

九月三十日(木) 快晴 マイナス四度

九〇〇〇 Khare 発

一一二四五 Tangnag 着

足元の汚水、食卓の食べ物さえ無視できれば、朝日を浴びながら眺めるKhareの周りの大自然は、スイスをふたまわりほど立派にしたような美しさ。堪能する。

一〇月一日(金) 霧 六度

八二一五 Tangnag 発

一一二一五 Kote

一四〇〇五 昼食後発

一五三三〇 Mosom Karika

一七七一五 Taktore 地図上 View Point

Tangnagの美しい紅葉はやや色あせてきたが、相変わらずの見せ所。苔むす転石群と樹林が現れてくるとKote。店が全部オープンし、賑やかになっている。本流を離れて最後の登りはややきつい。ようやく薄暗いテント地に着く。今回は娘が三人いる小屋を利用。ポーターたちの弾む声が楽しげ。

一〇月二日(土) 曇り 四度

八二一五 Taktore テント地発

一〇一四五 四四四七m

一四三〇〇 Thuli Kharika 四三〇〇m

テント地から急坂を登ること二時間半、石楠花の群生地を抜ける。残念ながら見返って見えるはずのメラピークがガスの中。高原のお花畑はいつの間にか草紅葉に変わっている。

朝食べた卵が腐っていたのか二人とも腹がおかしくなる。

一〇月三日(日) 早朝快晴後ガス 二度

八二一〇 Thuli Kharika 発

一〇一〇一〇 大ケルン 四五七〇m

一〇一〇一五 Zatrwa La 四六一〇m

一一三三五 Chetrala 峠

一二三〇〇 Karika Tang 四二二〇m

一三三三五 昼食後発

一六三〇〇 Chutanga 三〇二〇m

一六三三〇 テント地 二八六〇m

三〇〇mの最後の登りを済ませると眺望満点の峠のすがすがしさが、ガスでも見えず。いよいよ最後の難関一六〇〇mの下りにかかる。左足先を傷めないように慎重に降りたら大きな痛みを感じず無事下りきる。出発前から一番心配したところを通過してほっとする。

泉谷の腹は正露丸で収まったが、こちらの腹はいつまでたっても気分が悪い。

一〇月四日(月) 快晴 五度

七二五〇 テント地発

一一一〇五 ルクラ着

快晴の中美しい雪と岩山を眺めて最後の朝歩き始める。腹は相変わらず変。ルクラの宿は人で一杯。早速シャワーを浴びて一九日ぶりのひげをそり、垢を流す。パソコン整理に余念なし。

一〇月五日(火) 快晴 一〇度

第二便の飛行機でカトマンズ帰着

一〇月六日(水) 快晴

CX6705 一〇一五pm カトマンズ発

一〇月七日(木) 曇り

CX504 二二三五pm 成田着

六粟五〇名山(天空回廊)を 全山登頂して

川崎 徹

兵庫県六粟郡の山崎町、一宮町、波賀町、千種町の四町が合併し二〇〇五年四月六粟市

が誕生した。それを機に地元有志と西播磨の登山家たちが市内の五〇山を選定して宍粟五〇名山と名づけた。二〇〇九年五月神戸新聞社から「宍粟五〇名山」天空回廊一〇〇〇mの風についての」という登山ガイドブックが刊行され、宍粟市観光協会が五十名山のスタンプリーを行っている。私と妻郁子は昨年からのラリーに参加し、今年七月二十五日

全山登頂を終えた。押されたスタンブから日数を数えると、このための入山日数は三二日だった。私たちは赤穂市に住んでいるので、相生市、たつの市を経由して北上すれば一時間、宍粟市に着く。最北端の氷ノ山でも二時間以内に登山口に着ける。この地の利を生かして、早朝六時に赤穂を出発し、一日二山多いときには三山登って帰ったこともある。下山後は宍粟市内に六ヶ所ある温泉のどれかで汗を流して帰ることにしている。全山登頂者は宍粟市観光協会に登録されるが、私はNo.86、郁子はNo.87だった。

宍粟といってもなじみのない人が多いかも知れない。宍粟市は兵庫県の西部に位置し、北部の波賀町、千種町は鳥取県、岡山県と境を接している。県境山地は中国山脈の東端で氷ノ山（一四六四m）、三室山（一三五八m）、後山（兵庫県側からは板馬見山と呼ぶ、一三四四・六m）など一〇〇〇mを超える山が連なっており、兵庫県の屋根といってもよい地域である。日本山岳会が企画した日本の分水嶺踏破の際、宍粟市北部の中国山脈分水嶺を担当した関西支部支部長重広恒夫氏は、「密生している太いネマガリダケに悩ま

され、頭にヘルメットをつけザックを手で引きずって通過した。全国で最も厳しい分水嶺踏破だったであろう。」と講演会で語っていた。しかし、この地域も鹿による被害がひどく、葉を食べられて立ち枯れたネマガリダケ、表皮を食べられて立ち枯れた杉や檜の巨木がある一方、山頂付近には鹿の食べないアセビが群生している山が多い。

宍粟は八世紀に編纂された「播磨風土記」に「多くの谷で鉄を生ず」と記載されているように、古くからたたら製鉄が行われ千種銅として知られていた。砂鉄採集には谷の上部の草木を伐採し雨で土砂を谷筋に流れ込ませるといって荒っぽい方法が採られていた。宍粟の山々はやせ尾根が多いのはそのせいかもしれない。氷ノ山は別の名を須賀ノ山と呼ぶ。その名前の由来について諸説があるが、須賀は砂鉄を意味すると私は考えている。砂鉄はかつて砂処（スガ）と呼ばれ、菅谷、須賀谷と呼ばれる谷は砂鉄採集が行われた谷が多い。今の音水湖周辺には鉄山（たたら製鉄所）が多くあったので、須賀ノ山の由来は氷ノ山南側の谷筋で「須賀」の採集が行われていたことによるのではなからうか。

宍粟五〇名山の高度は、最北端の氷ノ山（一四六四m）から最南端の南山（四三二・一m）の間に分布しているが、登山道が整備されていない山、二・五万分の一地形図に山名が記載されていない山も多い。林業の盛んな地域だけに縦横に走っている林道沿いに立っている登山口のポール、または木にぶら下がっているA4サイズの白いプラ板を見つけ

て登山道へ入る。あとは赤いテープを追ってただひたすら登っていくだけであるが、林業の作業の目印につけられたテープがいたるところにあり、当初は作業テープに惑わされてルートをとれることがよくあった。またガイドブックでは林道から登山道へ入るように記載されている山が多いが、昨年八月隣の佐用町で一八名の命と二人の行方不明者を出した集中豪雨は宍粟の山々を通る生活道路や林道にも大きな被害をもたらした。丁度その集中豪雨の日私たちは、地元の友人たちと音水湖の東にある三久安山（二一三二・二m）を登る予定をたてていたが、天気予報を見て中止した。国道九号線から登山口にいたる林道は土砂崩れのため長い間通行止めになったので、強行していれば、車を林道に放置しなければならぬ災難に見舞われたかも知れない。

OKYAN二〇〇七に歩いた風光明媚なことで知られる福知溪谷沿いの道路も集中豪雨でずたずたに切断され、一年以上たった現在も不通のままである。復旧は生活道路優先であまり使用されない林道は放置されたままなので、ガイドブックの記載どおりに登れない山も少なくない。私たちは宍粟の山へ行くときは林道の最新情報が集まる「しそウ森林王国」に予定する林道の状況を問い合わせながらルートを決めている。私たちの五〇名山最後の山となった波佐利山（一九二・六m）は登山口まで約八kmの林道があるが、修復工事中で車が入れないため往復四時間の林道歩きを強いられた。

一〇年間続いたOKYAN（岡山の山を登

る会)は二〇〇七年から山登りの対象を兵庫県に移した。二〇〇七年はススキで有名な砥峰高原を散策し、文化勲章を受章した作家田辺聖子が愛する福知溪谷を下った。この福知地溪谷は現在通行できないことは先に述べた。その翌日は大國主命と天の日槍の争いが山名の由来とされる藤無山(二一九三・二m)に登った。二〇〇八年は一日目宿舎東山温泉のある東山(二〇一五・九m)、二日目は雨が降る中を植松山(二一九一・一m)に登った。二〇〇九年は一日目赤松一族宇野氏の山城長水山(五四八・八m)、二日目は大甲山(一〇三五・三m)に登り、健脚組みは荒尾山(一一〇八m)まで足を延ばした。今年のOKYAN二〇一〇は、一日目、南部の国

見山(四六五m)に登り、二日目は戸倉峠から赤谷山(二二一六・四m)に登った。赤谷山は地形図に山名は記載されていないが、ばんしゅう戸倉スキー場の西、鳥取県との県境稜線にある二二一六・四mのピークである。その昔孤高の人加藤文太郎が山頂の景観に感激し、自分の名前を記した木片を二等三角点の横に埋めたという言い伝えがある山であり、宍粟五〇名山の中の名山とわかっていいと考える。たまたま「宍粟五〇名山」赤谷山の項の筆者は私たちと同じ赤穂市在住で早朝登山の仲間大和紘さんであり、現在も宍粟五〇名山ルート整備のボランティアをされているので、宍粟五〇名山登山の際は最新情報を提供してもらっている。

AACKニュース

名誉会員 西島安則氏 逝去

今秋九月三日、本会名誉会員である西島安則氏が逝去された。享年八三歳。京都大学名誉教授。工学部高分子化学専攻。氏は一九八五年より一九九一年まで京都市立長、一九九八年より二〇〇四年まで京都市立芸術大学学長をつとめられた。氏が総長として九〇年AACKの梅里雪山遠征には募金活動で大変お世話になり、その遭難時にも留守本部の置かれたルームにかけつけ、「私が必要ならいつでも北京に行きます」と力づけていただいた。九一年二月北京で開催された中

国登山協会主催の日中合同追悼式には総長じきじきにしたためた追悼のことはをいただき、斎藤惇生氏が代読された。同三月京大体育館で開催されたAACK主催の追悼式には弔辞を賜り、また列席された隊員のご家族ひとりひとりに丁寧にお言葉をかけていただいた。梅里雪山遭難の追悼誌にも一文をいただいている。

会員一同追悼の意を表します。

梅棹忠夫先生をしのぶ会

一〇月二〇日に国立民族学博物館で「梅棹忠夫先生をしのぶ会」が開催された。館一階の正面にお元気な写真が飾られた祭壇に、一

時半から淳子夫人、須藤健一現館長、歴代館長の献花のあと二〇〇人の参列者の献花の列が続いた。当日は休館日であったが二階の展示室が開かれ、アフリカの展



示場には「梅棹忠夫の足跡」と題してその関わりの写真が展示された。また講堂とセミナー室では氏の映像資料が上映された。当日樋口敬二氏から、AACK会員が遺影の前で「雪山賛歌」を歌おうという提案があったが、通知がうまくゆきわたらず、実現しなかったのは残念。

同館では二〇一一年三月一〇日から、特別展「ウメサオタダ展」が開催される。氏のフィールドノートなど遺品も展示されるという。

京大山岳部

ニレカピーク登頂報告会

今秋一〇月八日に京大山岳部の現役隊がニレカピークに登頂。その後現役はエベレストBCへのトレーニングをへて無事帰国。一月一三日その報告会が京大近くの「天寅」にて開催された。スライドを交えてOBの根岸

隊長が報告。笹谷、阪本、松林OBや若手のOB合わせて一〇名に現役八名が参加した。この登頂の報告は次号五六号に掲載予定。

新刊書紹介

「文庫版 梅里雪山 十七人の友を探して」

小林尚礼著 ヤマケイ文庫

一一〇〇円十税

二〇〇六年に上梓された単行本の文庫版であるが、その後の搜索の活動や現地の様変わり、村長の娘さんの日本留学などのニュースを「文庫のあとがき」にまとめている。年表もその後が加えられたほか、本会会員齋藤清明氏が『解説 聖山「カワカブ」』と題して梅里雪山の登山史やAACKとの関わりなどを手短かにまとめてくれている。すでに単行本をお持ちの方にも架蔵をおすすめする。

本書は新刊書店で購入することはできないが、著者小林氏に誌代と送料合計一、三五〇円を送れば、サイン入り本に梅里雪山の写真のポストカード二枚をつけて返送いただける。

「わが登山人生」

平井一正著 A5判 二二二ページ

土倉事務所印刷

傘寿を迎えた著者の人生記録。氏はいままでも人生の節目ごとにケルンを積むように著書を上梓されてきたが、その四冊目。著者が

チョゴリザ、サルトロカソリは隊員として、その後のシェルピカンリ、クーラカンリ、ルオニイ峰へは神戸大学山岳会の隊長として大きな遠征隊に参加されているのはよく知られているが、ほかにもチベットやスワート・ヒンズクシも踏破しておられる。われわれにとつて実にうらやましい人生であるがその実現にはやはり並大抵のご苦労もある。とくに表の学問のほうの仕事もこなされているのは、瑞宝中綬賞の叙勲が証明している。本書について著者のもとに、若いときの記録がいろいろ、また各章ごとに一冊の本になるのにとの書評が寄せられている。

本書は私家版であるが、一冊二五〇〇円(送料込み)で土倉事務所(住所は本誌奥付け参照)に申し込んでいただければお頒けできるとのこと。残部僅少。

会員動向

訂正とお詫び

五五号「ペルーアンデス・ブランカ山群トレッキング」の記事中五ページ二段目第一行

目と六ページ三段目二三行目の齋藤惇生氏の名前を「淳」と表記しておりました。また六ページ六行目の「ブラウン山群」は「ブランカ」の間違いです。

同、五ページ一段目第二行目と四行目のJAICAはJICAの間違いです。

訂正してお詫びいたします。

編集後記

本号を十一月に発行すべきところを一ヶ月遅れてしまいましたことお詫び申し上げます。

現役諸君のニレカピーク無事登頂の報を聞き、早速その模様を今号でお伝えしようと思いましたが、かなわず次号掲載となりました。

本号編集集中に廣瀬幸治氏の急逝の報が入りました。旧制から新制へ、そして京大山岳部誕生の頃の実態をよく知っておられる最後の方を失くしてしまいました。次号に追悼の文を掲載します。

次号発行予定 二〇一一年二月下旬、原稿締め切り 同年一月二〇日。

発行日 二〇一〇年二月末日

発行者 京都大学学芸部 会長 上田 豊

発行所 〒六〇六八五二

京都市左京区吉田本町(総合研究二号館四階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所